一般口演

1　原始巫医の世界的普遍性の考察

奥富敬之

日本史上の各時代における医師の各時代ごとの主要な社会的存在形態による分類は、歴史発展五段階説による時代区分と、きわめて明確に対応するものと考えられる。すなわち次のようである。

原始――巫医
古代――官医
中世――僧医
近世――儒医
近代――洋医

もちろん以上は「主要な」社会的存在形態による分類であって、それぞれの時代に他の時代において主要だった医師が、まったく存在しなかったということではない。よく知られるように儒医が主要だった近世にも、巫医的な陰陽家や祈禱師も存在し、幕藩に仕える官医や寺院での僧医はもちろん、蘭法を事とする洋医も存在したのである。

このような各時代における医師の主要な社会的存在形態のうち、原始の巫医は注目すべきものと見ることができる。最古の医師の存在形態であったという点ではもちろん、健康の維持あるいは保全を基本の目標としている点などにおいて、現代においても精神あるいは思想の面では、充分に考慮されるに価いするからである。

巫医が行った療法は、かって石原明氏が「魔法医学」と呼ばれたものである（『日本の医学』、至文堂）。「医」という文字は、「醫」という文字を経て、「毉」に端緒を発している。「矢を入れた箱を右手に持ち戈を左手に持った巫」の意味で、これが東洋的な巫医であったのに対し、medicine dance を踊る medicine man こそが、西洋的な巫医であった。基本的に両者には、相異はない。

日本史原始における巫医のありかたは、『古事記』、『日

本書紀』の神話に活写されている。三輪山に住むと信じられた蛇の化身である大三輪神が医を専当する主医神で、健康の保全あるいは回復を願う国民の祈りを、大三輪神に取り次ぐのが、医神としての大国主命で、これにとくに健康保全を専当する少彦名命が、副医神として脇侍しているというのが、その基本的な図式だった。

以上はたんなる神話というだけではなく、かなりの程度まで、信じられる図式であった。「魏志倭人伝」に見られる邪馬台国での図式も、これに近似しているからである。邪馬台国での主医神の名は、記録されてはいない。しかし女王卑弥呼が「事鬼道能惑衆」ということを所務としていたとあるから、卑弥呼こそが医神だったということになり、その所務としていたことから見ても、主医神の存在が信じられていたことは疑いないところである。「佐治国」だという卑弥呼の「男弟」は、たんに世俗のことを専当したというだけではなく、むしろ副医神としてのものだったと思われる。

そして神話における大国主命や、「魏志倭人伝」における卑弥呼こそが、いわゆる巫医である。そして神話での医神大国主命は、同時に出雲王国の国王であり、「魏志倭人伝」における医神卑弥呼は、同時に邪馬台国の女王だった。ともに医療関係の国民の願いを主医神に取り次ぐのが、その所務だった。つまり王権の一部に、医の機能があったのである。

ひるがえって原始の時代の諸外国を見ると、日本の原始社会に見られたのと近似した図式が、やはり見られるようである。

古代エジプトでは、主医神が人身鳥首の Thout で、王権の一部を担っていた高僧の Imhotep が副医神だった。代々の国王は、もちろん医神である。古典古代のギリシャ神話では、主医神が Apollo、医神は蛇杖を持つ Asklepios、そして副医神は健康保全を所務とする巫女の Hygieia だった。そして漢方の国である古代中国では、主医神は人身牛首の神農、そして副医神は国王でもあった黄帝だった。

原始の巫医が構成した社会的構造は、ほぼすべて同じだったのである。ここに原始巫医の世界的規模での普遍性が、感得されるのである。（日本医科大学歴史学教室）